

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 東大全共闘

1967年、大谷研究室のある東京大学・都市工学科ではなく、建築学科・修士課程の吉武・鈴木研究室に進級した。24歳の時である。

研究室では、電々公社からの委託で、社宅団地の住まい方調査を行い、住戸の平面計画を検討した。食寝分離、就寝分離や、畳就寝の時代から椅子・ベット型の住生活様式への転換が予見された時代だった。吉武泰水先生からは、数多くの調査サンプルを観察し、分析する過程で普遍的な定理や方向性を抽出する手法を学んだ。

1968年6月15日、東大医学部のインターン生たちが研修協約改定の話し合いを求めた。これに対し大学当局は機動隊を学内に導入し若手医師たちを排除した。これがいわゆる東大闘争の発端となった。青年医師連合が研修協約を求め、「白い巨塔」といわれた医学部・教授会、及び東大総長は警察力を使ってこれを学外に排除し、押さえつけようとしたのだ。

学生や大学院生、若手研究者たちは大学当局の行為を糾弾し、安田講堂の総長室に詰めかけ、東大総長との大衆団体交渉を求めて安田講堂を占拠した。

青年医師連合の要求を支持し、東大当局の機動隊導入に抗議して7項目要求を掲げ、各学部、各学年・大学院生などがストライキに突入し、東京大学全学共闘会議に結集した。

建築計画系研究室では修士・博士課程の大学院生、研究生、助手、卒論生らが委託研究や計画・設計業務の扱いや、青年医師連合が求めている研修協約について自らの課題として受け止め議論し検討を重ねた。建築計画系、環境系、建築史、建築構造系の大学院生や土木・都市計画系の大学院生でストライキに参加することを決定し、工学部1号館のバリケード封鎖を決行した。

この運動は私の進路に決定的な影響を与えた。

第1に、運動の先頭を切って問題提起したのが、私と同類の医学部の若手医師・研究者たちであった。第2に



1969年1月 安田講堂をめぐる攻防

東大で研究し論文を作成する行為自体が、研究成果を収奪し、教授たちの権力基盤を固める道具となる。第3にかかる大学の体制の中で研修を積み重ねること自体が機動隊の力で若手研究者を押さえつける権力構造の中に絡み込まれることになる。これを私たちは大学の帝国主義的再編と呼んだ。第4に、かかる体制に組み込まれる己のあり方を自己否定する行為が全共闘運動であった。

全共闘運動は、大学の学者・研究者の欺瞞性を暴き、学問・研究によって立つ位置を見つめ直し、進むべき進路を考え直し、建築実践のあり方を転換させるものとなった。

東京大学で何よりも私が多く学び、その後の私の進路を決定的に左右したものは、全共闘運動の体験である。

ただし、この時はまだ集合住宅の供給者の位置から建築設計をするのではなく、居住者・住民の位置から供給された建物の問題点を調査診断し、修繕改修設計を行うという立位置がはっきりと見えていたわけではない。

東大闘争の局面が厳しさを増したある冬の日、私は女房と奥日光にスキーに行き転倒して足を負傷した。スノーボードに乗せられ病院に運ばれ手術を受けた。松葉杖をついて東大にもどった。びっこは籠城戦の戦力にならないと、バリケード内には残れなかった。

1969年1月18日、19日の安田講堂をめぐる機動隊との攻防戦で、全共闘はどぶ鼠のように敗北した。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所主宰。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。